

飛鳥寺講堂跡の調査

奈良文化財研究所都城発掘調査部

1 はじめに

仏教の受容をめぐる^{もののべし}物部氏との争いに勝利した^{そがのうまこ}蘇我馬子は、日本最初の寺院の建立を6世紀末に始めました。これが飛鳥寺で、完成は7世紀初頭です。文献史料には^{ほうこうじ}法興寺、または^{もとがんこうじ}本元興寺という名も見えます。これまでの調査で、塔を中心としてその北、西、東に金堂を配置する特異な伽藍配置であることがわかり、現在は国の史跡として保護されています。講堂は回廊の北側、中金堂の^{しめんびさし}北方にあり、東西8間、南北4間の^{きだん}四面廂付東西棟礎石建物で、玉石積みによる基壇外装をもち、周囲に玉石組の雨落溝があります。建物の規模は、東西35.15m、南北19mと推定されています。講堂は、平安時代後期には廃絶したと考えられていました。今回の発掘は^{らいごうじ}来迎寺境内の南西部に調査区を設定して行いました。

2 発見した遺構

I区西半に、^{かこうがん}花崗岩製の巨大な礎石がL字形に4個並んでいます。礎石は大きいもので1.5mほどあり、上面は平滑で、柱の立つ位置に径約80cmの円形作り出しがあります。柱と柱の間隔は、東

2個の礎石間で4.5m、他は3.85mとなります。今回の調査により、講堂の南北規模は18.7mであることが確認できました。東方では、礎石は既に抜き取られています。また、各礎石の間には一辺約80cmの足場と考えられる穴があります。

3 出土した遺物

遺物はほとんどが瓦です。軒丸瓦が6点と垂木先瓦が1点出土しました。飛鳥寺創建時に用いたものや、奈良時代に屋根の葺き替えをした時のものがみられます。

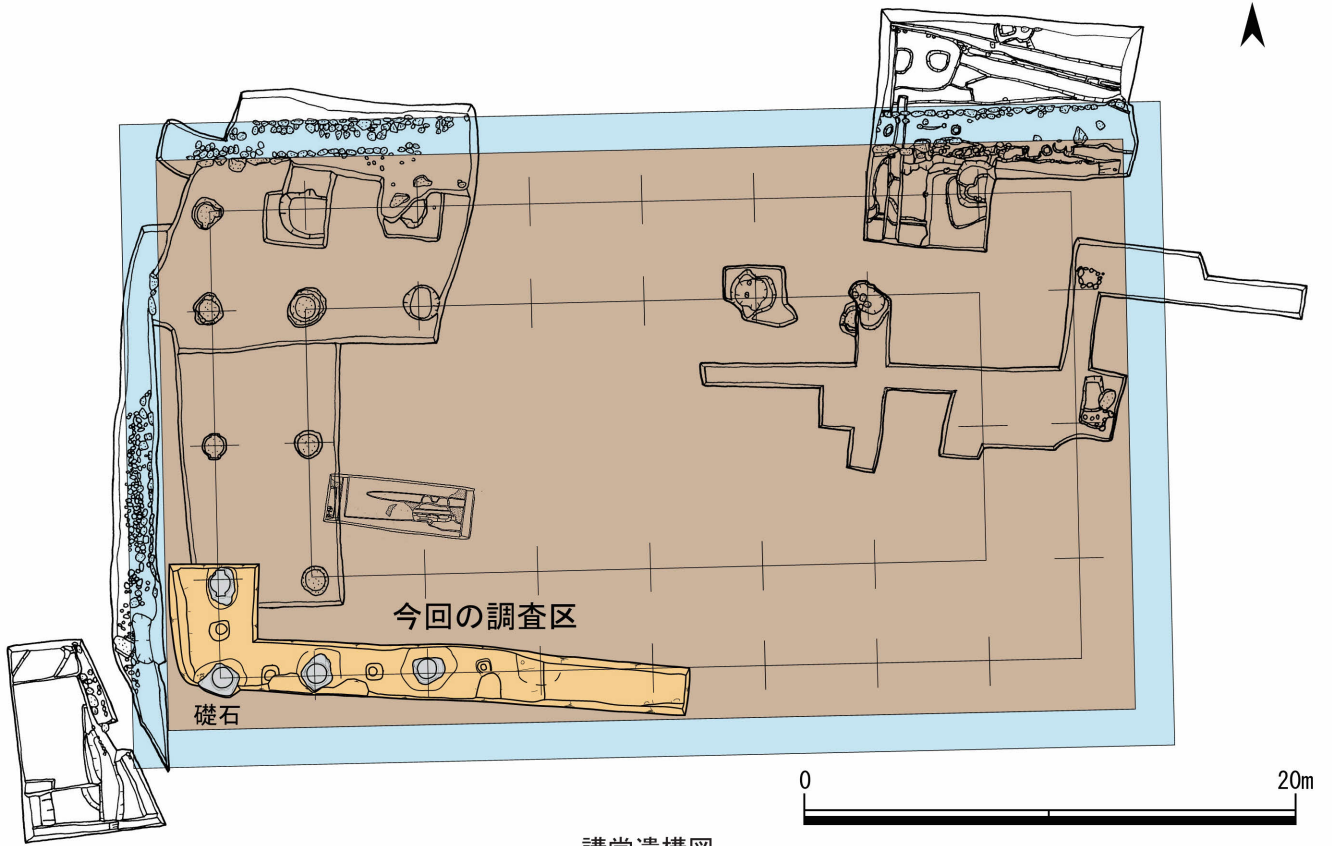
4 まとめ

飛鳥寺講堂の遺構を検出 講堂の西南隅を含む南辺を確認しました。礎石は新たに3個検出し、周辺の遺構の残存状況が良好であることが改めて明らかとなりました。巨大で丁寧な加工がある礎石は、わが国最古の寺院、飛鳥寺の往時の威容をしのばせます。

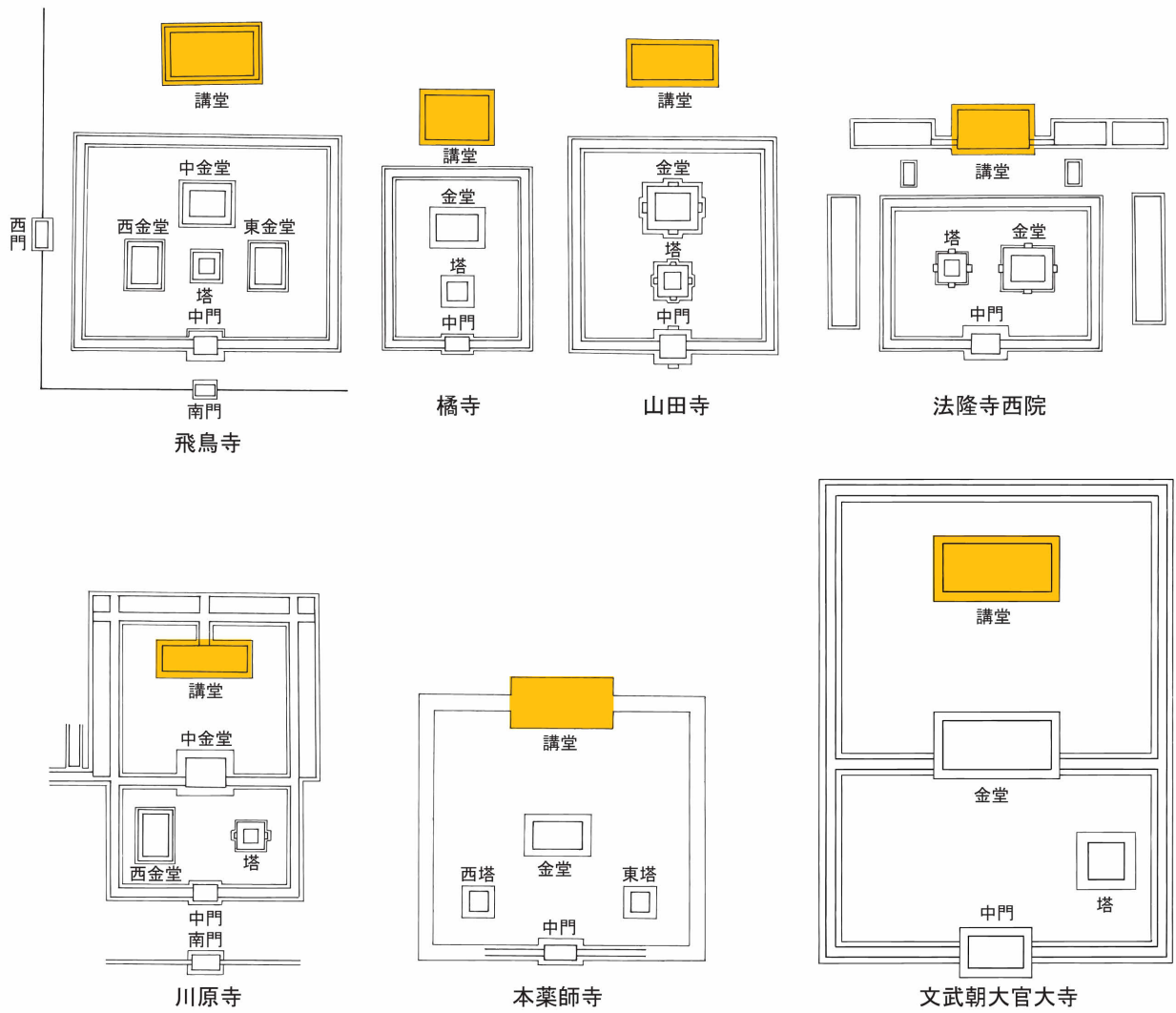
講堂の造営の様子が明らかに 今回は礎石とその据付穴などを初めてセットで確認しました。初期寺院の建築方法を知る上で、重要な知見と言えます。

2006年11月





講堂遺構図



古代寺院の伽藍一覽